

## 売らんかなの製薬企業

東京 HIV 原告訴訟団の早川と申します。時間が限られていますので、製薬企業の非人間性と日本赤十字は何をやっていたのかということ、病院の院内体制というこれら3点について、私の思っているところをお話したいと思います。

まず、危険な血液製剤が使われているということで、アメリカでは早期の1983年の段階で非加熱製剤は使用を禁止されました。以降、日本で製剤が認可されるまでの2年半にわたって、アメリカでは売れない血液製剤がどこにきたかということ、全部日本に流入して来ました。つまり製薬会社は、アメリカでは売れないものを日本で売っていた。非常に倫理的に何をかいわんやという事態が2年以上、最悪3年続いたんです。加熱製剤の承認後、非加熱製剤は回収されませんでしたから、その後有効期限がほぼ3年ありましたので非加熱製剤がわれわれ患者に対して、最悪88年まで注射されたという投薬証明が残っています。実になんという製薬会社の対応でしょうか。製薬会社は売ればいいという対応なんです。

## 作られたエイズパニック

そしてわれわれが直面した苦難というのが、感染源というレッテルです。製薬会社が利益を上げるなか、われわれは感染源というレッテルを貼られて辛い生活を送らねばならなくなりました。ここは大阪ですから十数年前の神戸でのエイズパニックのことはよくご存知でしょうが、松本でのエイズパニック、高知でのエイズパニック、それらによって完全に私たちは打ちのめされました。既に非加熱製剤の危険性というのが論じられた後ですから明らかに厚生省の中でも製薬会社の中でも薬害という認識はあったんですが、それらを覆い隠すかのように、エイズ

パニックが演出されてエイズ予防法という形で完全に封じ込められてしまいました。非常に恣意的な行動だったと思います。

私たちは、セックスによってうつる媒体というレッテルを貼られて、病院でもまともに看てもらえなくなって看護婦さんには手も触ってもらえなくなり、脈もとってもらえなくなりました。正常な療養体験を受けられないまま、10何年間に患者はどんどん亡くなっています。今週もまた何人も亡くなるもんですから、毎週毎週亡くなるもんですから私もイライラしてしまっています。

血友病患者が二次感染源としてクローズアップされたのは、高知エイズパニックでした。HIV陽性の女性が赤ちゃんを産むことに対し、厚生省が大変な懸念を抱いていると発表した87年のことです。その女性の相手が血友病患者だったということで、私たち血友病患者は国民から害の根元であるというレッテルを貼られました。

しかし考えてみて下さい。血友病患者が感染源となる前に、製薬会社は何年間にもわたって4000人も血友病患者に対して大量の血液製剤を供給して来たのです。仮に血友病患者が4000人いるとして、年に20本の血液製剤を使うとすると、延べで80000回、それが3～4年にわたって危険であると判った後も供給されていた訳ですから、実に24万回、コンドームを付けてないセックスよりも確実に血液に直接流入するという方法でわれわれはレイプされたのです。その間、誰も何もしてくれなかった。製薬会社も何もしない。製薬会社はそれで利益を上げていた。厚生省は安穩としていた。権威のある人たちは威張っていた。薬剤師の人たちも声を上げなかった。誰も何もしてくれなかった。これがその実態です。

## 日本赤十字の二枚舌

そういった中で、日本赤十字というのは血液事業を一手に引き受けているんですが、彼らが去年（1996年）の国会での証言の中で、「依頼があれば国内血で作ることは出来たんだ」という証言をしました。しかしあの83年当時、緊急回避措置として国内血で血液製剤を作ったらどうかという打診に対して、日赤が何と答えたかということ、「善意の献血を血液製剤というコマーシャルリズムに乗った製品に対して使うことは考えられない」、こう答えたんです。何という日赤の二枚舌の対応でしょうか。

日本赤十字は赤十字精神という高らかな精神にのっかって、菊の御紋の元に事業を展開していたはずなのに、このような対応です。今も引き続き日本赤十字と私たちが話し合いをする中で、すぐに善意の献血という話になってしまいます。もともと責任をとれないようなところにお任せしていたのでは、将来にもわたって危機を回避するための努力というのはその団体の中では当然成立し得ないと思います。そういった意味で、もっと責任を明らかにして、緊急回避措置が取れる能力があるところに血液事業は移管されるべきではないかと思えます。

## 病院内に相互チェック体制を

次に病院内の体制について、私の感じることをお話します。血友病患者は第八因子製剤あるいは第九因子製剤という注射をすることによって、血液凝固因子を補充すれば確実に皆さんと同じように血液を止める止血能力というのが瞬間にして回復します。それはまさに魔法のような効き目です。内科のお医者様に言わせればとても切れ味のあるもので、注射すればものの2～3分で痛みも消えてスパッと効きます。それに患者はその医者が治してくれたという幻想を抱くようになります。医者も自分が治してやったんだという錯覚を起こす、そこにいわゆる血友病ムラという非常に閉ざされた環境が出来てきた。

その血友病ムラというのが十何年間の間、安穩としている間にこういう問題が降りかかった

訳ですが、そのときに私たちにに対して何もしてくれないんですね。「先生、危ないんじゃないでしょうか」「大丈夫でしょう」「アメリカでこんな病気がはやっているとってます」「あんまり気にしなくてもいいんじゃないか」と。振り返って見れば、そのとき彼は既に私の抗体検査を抜き打ちでやってまして、私が陽性であるということを知ってたんですね。なのにそういうことを言っていた。私もこの先生が今まで自分の治療をして来て来たというので、なかなか言えなかったんですが。

しかし、いよいよCD4の値が下がってくるにつれて、「先生、もしも私が発病したらどうなるんでしょうか」と尋ねると、「僕の病院では診れないよ」ということになりまして、これ以上この先生に診てもらっていたら自分は死んでしまうとやっとなんかその主治医を断ち切って、本来のHIV専門の病院にたどり着くことが出来ました。多くの患者は今もなお、その先生方に対しての気兼ねから声も上げられないでいることが多いんです。

アメリカでは病院内に委員会等が設けられていて、定期的に先生方のカルテを引き上げて正しく投薬が行われているか、診療が行われているかチェックしている。合格すればCONGRATULATIONというペーパーが机の上に置かれているというように、非常に厳しいチェックが行われていると聞いています。私が当初かかっておりました血友病の先生に関して言えば、薬剤師さんとか、院長先生とかのチェックが介在していたとは到底思えないんですね。出来ることならば日本でも、院内に委員会のようなものを設けて定期的に先生方の投薬チェックを薬剤師さんを入れてやって欲しい、適切に投薬がおこなわれているか、薬と薬が他の科とぶつかっていないかなどチェックをもっと厳しくやっていけば、先ほどのソリブジンにもありましたけれども、水際でかなりのことが防げるのではないかと思います。手短ですが、私の考えていることは以上のようなことです。